

欲望／ストリート／生活



◇大塚隆史、『ニ丁目からウロコ——新宿ゲイストリート雑記帳』（翔泳社、1995年）

山北 輝裕

本書は、新宿二丁目でゲイバーを経営する筆者が、二丁目という場や、そこでの出会い・泣き・笑いなどを、自身の過去も盛り込みながら、抜群の語り口調でふんだんに描いたものである。

新宿二丁目は世界一のゲイタウンであると筆者はいう。ここには、3つの特徴があるとされている。一つは、ゲイバーの数がおそらく世界一あるということである。そして、そのバーは少人数しか入れない小規模なものが多い。二つ目に、そのバーの料金は1杯1000～1500円ほどで、安く設定されている。そのため、いろんな客層が週末には何千人と集まるとされている。三つ目は、客が気に入った店を何軒もはしごすることである。「誰かいい人と巡り会いたいナ」と思って来ているのだから、お目当ての全くないような店にグズグズしては、他の店にいるかもしれない大きな「獲物」を逃してしまう。筆者はこの街と人の様子を「二丁目という小さな水槽をグルグルと回遊する」と表現する。

欲望が、ストリートへ人を誘うエンジンとなる。けっして、セックスのみの欲望ではない。筆者もいうように、二丁目にはセックスと、セックスにまつわることが多いが、そうした一

枚岩的なイメージでとらえることはできない欲望がストリートをうごめくことになる。たとえば、非常に重要なことであるが、友人をつくることである。筆者は二丁目をとおしていかなる「関係」をもつことができるのかと、模索しながら滔々と語っている。ただ単におもしろい話を聞きたい。そのバーを拠点にしてスポーツをするサークルがうまれたりなどなど…。

そうした人びとがいかなる関係を結ぶのか。それは、本書を手にとって確かめて欲しい（そしてまた、これらのエピソードが赤裸裸に描かれること自体、筆者と集う人びとの関係性を現しているだろうし、さながら自分がバーの客になってしまった錯覚すらある、といってしまうと言い過ぎだろうか）。

ストリートにおいて発散される欲望というつかみどころのない力のあつまり（匂いや音、色なども含まれるだろう）を、社会学においてどのような角度から捉え返すことができるだろうか。そのためには、もちろん、クィア・スタディーズの知見は欠かすことができないし、現在の二丁目を語るには本書はやや古いかもしれない(*1)。しかし、二丁目に限らず、ひろくストリートにおける、欲望と生活の重なりや、相反するダイナミズムに近づくために、本書は

決定版ともいえる貴重な一冊である。そして、欲望に真摯に向き合った筆者の、運動と生活、欲望の連続・非連続性についての言及も読者を引きつけることになるだろう。

なお、筆者のバーでは、ゲイを意識したアートを募集・展示し、出会いを模索している。ホームページでも紹介されているので、そちらも参照されたい。(http://www.asahi-net.or.jp/~km5t-ootk/tacsknot.html)

(※1) たとえばゲイ・スタディーズについては、キース・ヴィンセントら『**ゲイ・スタディーズ**』、二丁目の現在については、竜超『**消える新宿二丁目**』などを参照（いずれも「関連文献」に挙げてある）。

関連文献

竜超、2009『消える「新宿二丁目」―異端文化の花園の命脈を断つのは誰だ?』、彩流社。
ヴィンセント、K、風間孝、河口和也、1997『ゲイ・スタディーズ』、青土社。

(やまきた・てるひろ 関西学院大学大学院社会学研究科大学院 GP リサーチアシスタント)